

日本舞踊における 奴舞踊の技法研究

丸茂 祐佳

〈研究目的〉

日本舞踊の中に、奴を題材とした舞踊が数多くある。本研究で取り上げた「槍奴」「国入奴」「小原女」の奴)「鶯奴」「猿舞」「供奴」は、奴舞踊の中でも代表的かつ一般的なものであり、これらの作品を対象にして、奴の動作とはどのようなものであるのかを考察した。

だが、日本舞踊には役柄というものがあるのは、周知のことである。そのために、同じ動作でも、役柄が異なると、表出されるイメージが異なってしまう。奴についても同様である。私の未熟な経験ではあるが、今日踊られている舞踊の状況から察すると、奴の動作の中には、三枚目・丹前風・荒事、どんな動作も融合されているように思う。武士の下僕という性格から三枚目的な表現、主人の供をして遊廓へ行ったり、主人の自慢(真似)をすところから丹前武士風な表現、「これでも武士のはしくれ」という意地から荒事的な強さが表現できるのである。つまり、多くの役柄の中であって、奴というものは、武士と庶民の間を往来して、この二通りの生活を表現できるキャラクターを持ち合わせていると言えるであろう。

次あげる芸談は、奴の動作を、端的で明確に表現しているものである。

- ・奴の踊りは片足が地につかないうちに、もう一方の足を上げる。それには三味線との呼吸が大切だ(7代目坂東三津五郎・『日本舞踊全集』第1巻「小原女」観賞の手引、より)
- ・足をぐっと割って腰をうんと落とし、構えの重心をうんと低いところに置いてバランスを取るのが奴の基本的な構え(泉徳右衛門・『日本舞踊全集』第3巻「関三奴」踊る心得、より)

この2つの芸談から、奴の動作を決定することは、特定の動作を指定することではなく、間・腰の入れ方・足拍子などが、重要な要素であることがわかる。

従って、本研究では、相対的に多く使われている動作を抽出し、奴らしさを決定するのは、特定の動作ではないと実証することを目的とした。

〈研究方法〉

- (1) 研究対象作品 長唄地の奴舞踊「槍奴」「国入奴」「小原女」の奴)「鶯奴」「猿舞」「供奴」(但し藤間寿右衛門系の振)を対象とした。他に、西川流(宗家)、花柳流(芳瞳系)の「国入奴」「供奴」の振を参考とした。

- (2) 研究対象動作 ①特に腰から足にかけての動作—蹴り出し・返し・飛び跳ね・上げ—についての性格・特色・意味を検討し、そのうちの、相対的に多く使われている動作・奴らしいイメージを与える動作を抽出。②足腰の4つの動作を含まずに、相対的に多く使われている動作・奴らしいイメージを与える動作を抽出。

〈研究結果と考察〉

- (1) 力強い印象を与える動作……次あげる動作は、奴の動作でも力強い印象を与えるものであり、荒事や武士など強いものに使われる動作。

①蹴り出して次の動作を行なう

②蹴り出して決まる

- ・足を出すのに腰を深く入れ、前に蹴るようにして出す。力を入れふんばる動作である。

③六法

- ・六法とは手足を振る独得の形の歩き方であるが、奴舞踊では、曲の途中で一度舞台の後に入る時に多く使われている。
- ・『伎楽踏舞譜』の“六法之部、六法”に相当。

④飛割する

- ・息を止めパッと足を開く呼吸使いが必要。
- ・『伎楽踏舞譜』の“六法之部、花飛”もこの類。

⑤足を変えずに重心移動する

- ・重心を左右に、または、前後に移動する。粘っこい動作である。

・『伎楽踏舞譜』の“六法之部、丹扇・総角・須伊遷・九重”に相当する。

⑥首を左右に強く振る

- ・ただ左右に強く振る場合、うなづいてから左右に強く振る場合、最後に首をまわして決まる場合がある。

- ・出の決まりによく使われる動作で強い者の表現であろう。娘形でも「晒女」「官女」で使用。
- ・荒事では更に様式化され、“五ッ頭”“三ッ頭”と呼ばれる。

⑦腕をねじり出す

- ・奴の衣裳のからげ方をねじきりという。
- ・藤間流「供奴」へねじきりからげた、でこの動作をする。

⑧ギバ

⑨石投

⑩仁王立

⑪にじり寄せ

⑫力足

- ・⑦から⑫はともに荒事や強いものに使われる。
- ・少ないが、奴の動作にも使われている。

- (2) 拍子に合わせて軽快に動く……次あげる動作は奴の動作でも敏捷な、または剽軽な印象を与えるものであり、物売その他の町人に使われる動作。

㊸返す足を繰り返す

- ・動作を速く繰り返して行なうため、必然的に返す足となる。
- ・敏捷な印象を与える。上半身でおどけた形をすると剽軽になる。

㊹返してから反対方向に進む

- ・逆の反動をつけて(返す)、3歩進む場合が多い。
- ・節に合わせて返し、音を拾って3つ進む。従って返す動作をゆっくりと丁寧に行なう。

㊺足を上げて歩く

㊻入れ込んで歩く

- ・両方とも音を拾って歩くので敏捷な印象を与える。上半身でおどけた形をすると剽軽になる。

㊼一足はずんでから進む

- ・音を拾って足を踏み、逆の足を上げてから前へ出ると、勢いがある印象を与える。
- ・逆に曲の性格によりかぶるようにして出ると、抑えた印象を与える。

㊽甲うち(足甲拍子)

- ・拍子に合わせて足の甲で床を叩く動作であるが、片足の甲だけで拍子を取る場合と、交互に両方の足の甲で床を叩く場合がある。

(3) 身分が低い印象を与える動作……品のよくない、格の高くない動作。

㊸返す足で止まる・動作を行なう

㊹足を上げたまま動作を行なう

- ・足を返したまま、または上げたまま止まるのは、不自然な形であり、見た目も整っていない、美しくない。
- ・必要以上にエネルギーを溜めるので、印象を強くする。

㊺箱割で飛ぶ

㊻駈ける・駈ける真似(韋駄天)

㊼うろこ手

- ・㊸から㊼はともに下僕的な印象を与える。
- ・物売、その他町人にも使われる。

(4) 鷹揚な気分を出す動作……大名行列や吉原情緒などのんびりとした気分をかもし出す動作。

㊸足を振る

- ・「供奴」チャーンチャーンチャーンチャーンチャーンチャーンチャーンチャーン振って消しやるな、では鳴物(行列三重)も賑やかに打ち囃される。

㊹一足はずんで足を出す

- ・槍を持ってこの動作を行なうことが多い。

(5) 奴特有の動作……身分が低い奴が自分を誇示したいという意識から生じた動作。

㊸髭こき

- ・日本舞踊の奴には、髭のあるものは、あまりないが、“ひげ奴”“ひげまん”“作り髭”

などという言葉があるように、奴と髭はつきものであった。

㊹投草履

- ・奴の仕事に草履取り(草履持ち)がある。
- ・草履についた泥を払い、主人の前に投げ揃えるという動作である。

以上、奴舞踊の中で相対的に多く使われている動作と奴らしい動作の性格・特色・意味を検討した結果、これらの動作の多くが、荒事や武士などの強いもの、物売、その他の町人など世話のものにも使われている動作であることがわかる。

つまり、多くの役柄の中であって、奴というものは、武士と庶民の間を往来して、この二通りの生活を表現できるキャラクターであり、また、日本舞踊で奴を表現するということは、奴という役柄を踏まえて踊ることであると言えるのである。そして、奴という役柄を踏まえて踊ることは、間や腰の入れ方によるのであって、それは、日本舞踊の数多くの作品の修得と、充分な鍛練によって、身体で把握する以外はないのである。

〈おわりに〉

日本舞踊の技法の具体的な整理は、「舞踊譜をつくろう」という意志から始められてきた、と言えると思う。そして、その意志は、歌舞伎舞踊が歌舞伎から離れ、町の師匠や振付師などの専門の職業として分化した、自然に起こり得たひとつの現象とも考えられる。つまり、身体で覚えるための空間と時間の節約のために、また、忘却を防ぐために、譜に残しておけば便利で安心だからである。

しかし、何と言っても、日本舞踊を踊る上では、他の諸外国の舞踊と比して、終始技術のみに一貫することなく、その中に多分に役の心、性根を盛り込まなくてはならない。武士なら武士の、奴なら奴の、表現上の相違は、心根から発した結果のあらわれであるから、その心を、記号・絵図・文字にあらわしたり、分類することは、不可能に近い。その不可能に近い、技法を整理して譜をつくるということを嘉永7年(1854)初代西川鯉三郎の『妓楽踏舞譜』より120年余の間、一握りの舞踊家によって試みられてきている。舞踊譜が良いか悪いかは別問題として、技法を整理することは、先に述べたような必要にせまられた自然のあらわれであると同時に、日本舞踊が日本舞踊としての独立した道を歩き始めた自我のあらわれであると、信じている。

最後に、この研究に助言を頂いた目代清・駒井義之・藤間紋寿郎先生、調査に協力して下さった西川扇文女・花柳寛吉郎氏に、御礼を申し上げ、心より感謝する次第である。